TALES OF PHANTASIA
20TH ANNIVERSARY
ANTHOLOGY
大樹の下で
祝祭を

Illustration by キク

Illustration by 山田ちう

Illustration by 緑の6号

Illustration by 桜咲まこと

TALES OF PHANTASIA
20TH ANNIVERSARY
ANTHOLOGY

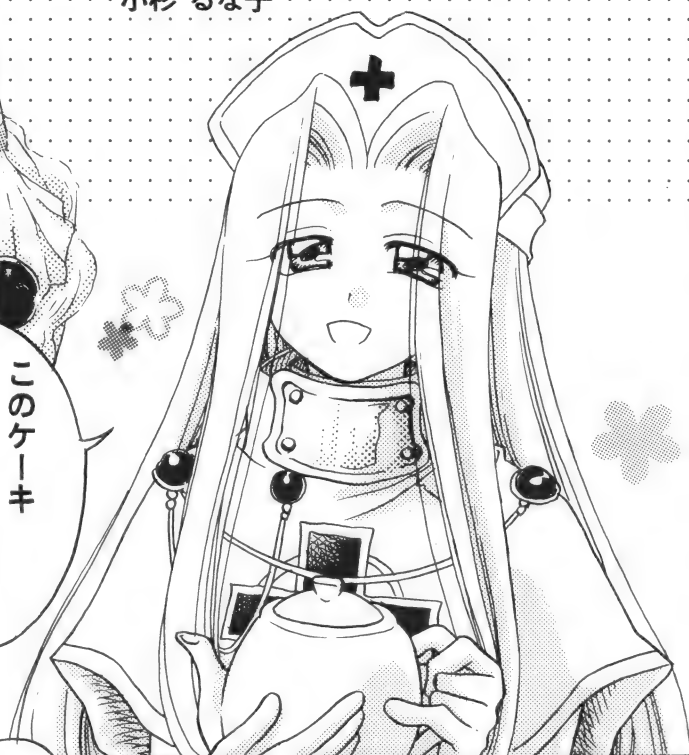
大樹の下で祝祭を

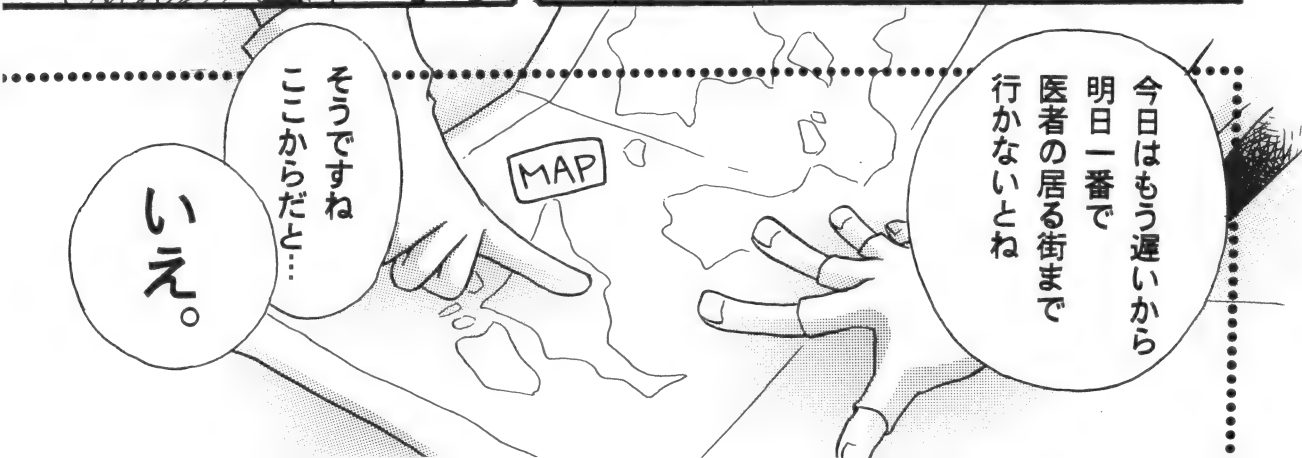
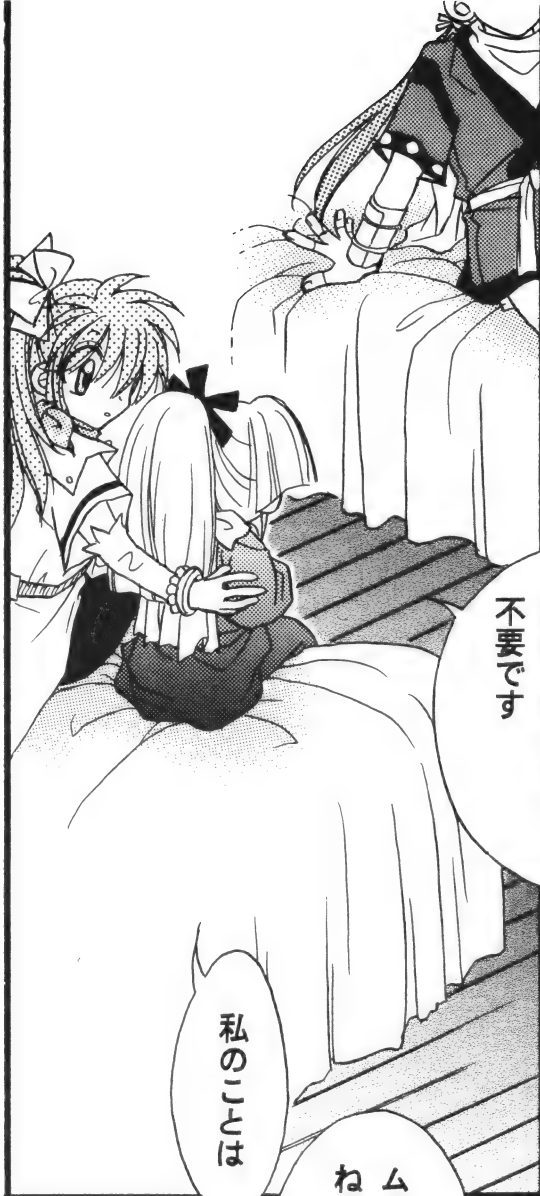
テイルズオブファンタジアが発売されてから
20年目という節目の年。
当アンソロジー企画にご賛同くださった
素敵な執筆者様に集まっていただき、
一冊の本となりました。
20年という長いようであっという間だった
日々に思いを馳せつつ
珠玉の作品たちをどうぞお楽しみください。

当アンソロジー企画に関し、
ご寄稿くださった執筆者の皆様、
サイトやツイッター等で告知にご協力くださった皆様、
そしてこのアンソロジーをお手に取ってくださった皆様に
篤く御礼申し上げます。

主催：相模碧

SO SWEET

小杉 るな子

って、
すずちゃん？
きいてるっっ
食欲が無かったみたい
だけど体調が悪い…とか
え？
がたんっ
だっ
だいじょ…
ほら
氷。
カラ
凍みるようなら
こっち。
ぬれタオル。

えええっ?
ムシバ!?
あーん。
それがなに…?
…
虫歯か?
もしかして。
す
すずちゃんっっ
大人びてても
やっぱりコドモなんだねっっ
かわいいっ
どんっ
ぎゅーっ
The Μαγιχκο οφ τηε Πριεστηοοδ
今日はもう遅いから明日一番で医者の居る街まで行かないとね
そうですねここからだと…
MAP
いえ。

ダオスとの決戦が
近い大事なときに
無駄な寄り道は
不要です
私のことは
ムダなんかじゃ
ねぇよ

決戦が近いからこそ
万全にしとかないとな
奥歯を噛みしめらんねぇと
力入んねーしさ

すずちゃんは
大事な戦力
なんだぜ？

はぁ？！

そーそー
チェスターと
違ってね～

また、バカって
言ったーっ

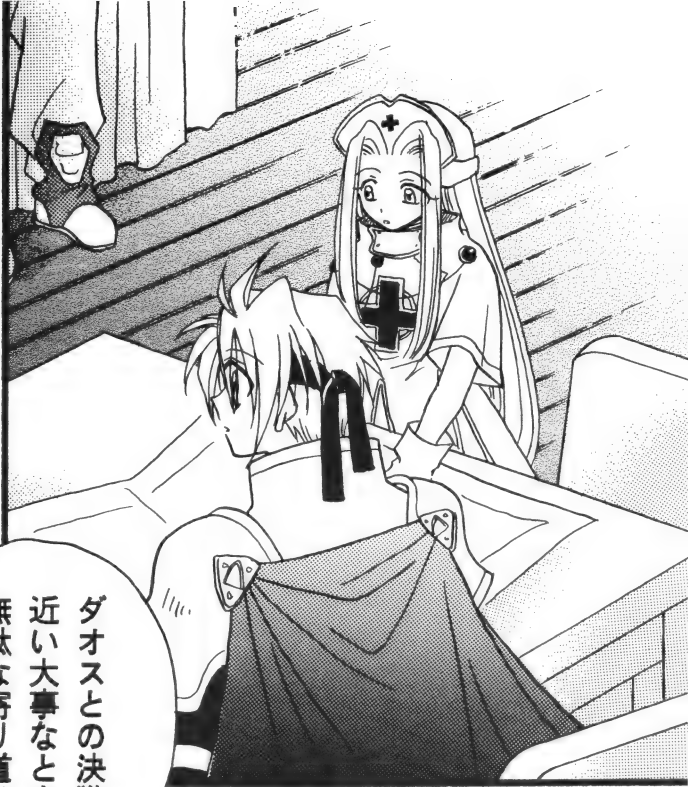
あー、うるさい。

まぁそうでなくとも
歯は早めに治療しておかないと
大変なことになるぞ？

大体何よ
アンタ！
すずちゃんには
笑顔
ばっか
むけ
ちゃって
さーっ

なに
言ってんだ
バカかお前

うるせぇ
バーカ

ちわゲンカなり。

自然治癒は勿論
薬や法術でも
治せないからな
そーそー！
クラースみたいに
なっちゃうよ?!
私が
何だ?!
ハゲがある
うえに入れ
歯
ぱこーんっ
いったーいっ
女殴る男
なんて
サイテー
ダンナ
なーいす♪
うむ。
躾だ。
ぐっ!!

ちょっと！クレスもなんとか言ってよ!!
いやもう自業自得としか…
ミント～みんなが冷たいよ～
おなかすいてない？
あまり噛まなくても食べられるようにおかゆ作りましょうか
あと、タオルも替えましょうね
こくん
すずちゃん
こそっ
…

ミントまで
冷たい〜〜
くすん
くすん
そういえば
アーチェもあまり
食べてなかったん
じゃないかい？
ギくっ
もしかして
アーチェもムシ
違うし
はは？・何
言ってんの？
ムダなこと
すんなよ
知ってるか？
ダイエットってのは
ムネから痩せる
らしいぞ？
ダイエット！
そんなわけ
ないし!!

プロポーションの良さってのは要はメリハリだろ?
あ、あんたそれセクハラだから
なけなしのムネが痩せたら元も子もねぇだろが
だから
必要ねぇだろつってんの
ぐいっ
これ以上細っこくなってどーすんだよ

20th Anniversary
ほれ。
ちゃんと食えよな
ケーキ食え。たんと食え。
わ、わかった…
…わよ
空腹でイラついて人にあたんなよ
ウマイ!
なーんだ。ヤツあたりだったのか。
いいぞ!チェスター
ばッ
!?

ぶしゃっぴくん!!!
…と、思ってください
すずちゃんおいしい?
みるくたまごがゆ♥
はひ
おいひいでひゅ
ごはんつぶついてるわ♥
おしまい♫

『ある夜のおはなし』　シャチ

あっ
いいにおいがする！

もしかしてこのボディクリーム
ですか？

これ雑誌で見た！
エルウィン社の新商品の
ボディクリームってやつ！
そうなんですよ！
先日購入しました

これだ！
ここに載ってる
でね！
TOP

取り扱ってるお店の隣に
新しくカフェも出来たらしいの！
スイーツがすっごく有名
らしいよ！
Cafe

それはまさかデートですか
そのお店、この間クレスさんと一緒に行きました☆

ピコーーン
じゃ、じゃあすずちゃん一緒に
私もこの間クラースさんにごちそうして頂きました！
食べるかい？

あそこの抹茶クリームぜんざいがとても美味しかったです。
ぼっちーーーん
わぁ～！いいですね！私はミルフィーユを食べました！

ボソッ
あたしだけ行ってない
いーなー

チェスターさんを誘ってみては
いかがでしょうか？
ドドドドーン
私もそれが
良いと思います！
なぬっ
なんでアイツなんかを！
ニヤ
ニヤ
ニヤ
第一嫌がられるに
決まって……！
いや
わからんぞ。
タッ
ドヤァ…
ピ。

なっ
クラースなんで
ここに!?

少しの勇気を
出してみることが
思わぬ好機を招く
ということもあるんだぞ

なんか良いこと言ってる
けど出てって〜〜〜!!
もーーーーっっ
クラースさんのエッチ!

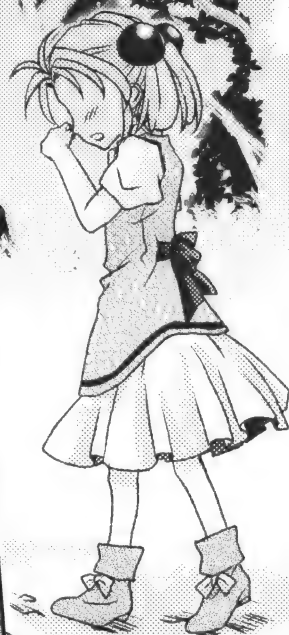
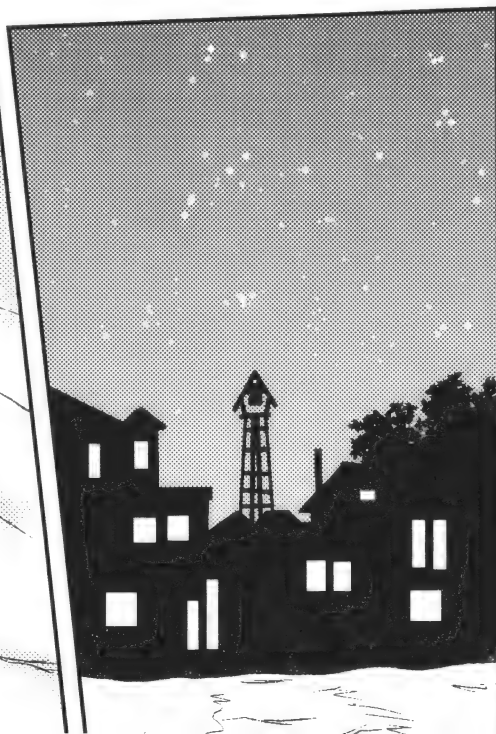
少しの勇気…かぁ…
むむむむむ

いいぜ！
あっさりー
俺も気になってたんだけど
クレスはこの間ミントと行ったばっかって言ってたしな
！
パンケーキがなぁ～うまそうなんだよなぁ～～
あたしハチミツパフェ～～！
お前食い過ぎて箒で飛べなくなるんじゃね？
むっきー
な～～～！！！
うっさいばか！！！
よかったわ♡

北の一つ星、ひとつ——
蒼乃りん
…
カララ
壊れてますね
ええーーっ
予備のコンパスクレス達が持ってるのに！
大丈夫です
こっちですよ
さっすがすずちゃん！
何で方角分かるの？
ぽすん

星？
あれです
はい
常に真北にある芯星です
天の柄杓星の口、先端の二つの星を結んだ線上にあります
北極星ってやつね
はい

ひっく
…う
つ…
あれ
もしかして迷子かな？
そっか
お兄ちゃんと
ケンカしたんだ

うん
ぐすっ
でも私が
悪いって…
わかってる…から
帰ったら
ちゃんと…
あやまらなきゃ
そうだね
送ってくれて
ありがとう
ございました
ペこり
いいって
用事のついで
だから

もう迷子にならないように良い事教えてあげる

道に迷った時は――

芯星だ

あっちが真北だな

ファルケンさん

ファルケンさんは
芯星のこと
知っているんですね
ああ
普通は北極星って
呼ぶからな
子供のころ
親父から
聞いたんだよ
あれ
私が話したのは
アーチェさんだったはず…
すずちゃん？
はっ
何でも
ありません
行きましょう
ああ

『その手を握る、意味』　ワタナベ　修

ミッドガルズ軍とダオス軍がヴァルハラ平原で衝突した、後に「ヴァルハラ戦役」と呼ばれる戦いは、ダオス軍を率いていたイシュラントを伐ったミッドガルズ軍が勝利を収めた。この勝利は、ミッドガルズの名立たる騎士達の活躍は勿論だが、誰よりも大きな功績を立てたのは、外部から突然やって来たという若い剣士と術師達に他ならなかった。しかし、その事実が歴史として広く知れ渡るのは、遥か遠い未来の話である。

ヴァルハラ平原に陣を敷いていたダオス軍を後退させた結果、長年に渡って進軍が叶わなかったダオス城への道が開かれた。一方で、先の戦いで蓄積したミッドガルズ軍の疲弊も大きく、すぐに軍を大きく動かせる状態には回復していなかった。しかし、ダオスとの直接決戦に持ち込める可能性がある今は好機とも言える。

そのため、各所での会議の結果、戦いの最たる功績者であるクレス達が、数日後にダオス城へ向かう事となった。

本来ならすぐにも出立するべきであろう。だが、戦いで負った傷はミントの法術で完治しているものの、体力の回復、そして何よりも、各々の覚悟と心の整理をつける時間が必要だった。

二、三日は街で自由に過ごし、それから出発すれば良い。そう決断したのは、クレス達の最年長であるクラースだった。

扉を小さく叩く音が三度響く。はい、とクレスが返事をした後に部屋へ入ってきたのは、朝食後にアーチェに手を引かれて外へと出て行った筈のミントだった。

「す、すみません、お休みの所をお邪魔してしまって」
「いや、寝てたわけじゃないから大丈夫だよ。それにしても、随分と早く帰ってきたんだね」

何せあれから一時間も経っていない。女性陣に続いてこの四人部屋から出て行ったクラースも、まだ戻ってくる気配は無かった。ミントの背後をちらりと見る。アーチェは

後ろに居ないようだ。恐らく未だ一人で街の方をぶらついているのだろう。
　クレスはというと。与えられていたベッドに腰掛けてはいたものの、特にする事も無くぼんやりとしていた。アーチェ達のように遊びに行く気分でも無かったし、訓練をする気にもなれなかった。こうしてミントが戻ってきたのなら、それで良かったのかな、なんて思う。
　クレスの返事を受けて僅かにほっとしたような表情をするミント。部屋の扉を閉めながら、その、と、呟く。
「クレスさんが居るかな、と思って、戻ってきました」
　それは、がちゃん、という扉が閉まる音にかき消えそうなほどの小さな呟きだった。
「そう、なの？」
　どう返事をしていいのか咄嗟に浮かばなかった。ミントはあまりそういう類の事を言う人ではないから、真面目に受け止めればいいのか、いっそ冗談っぽく返せばいいのか、思いつかない。
　だが、ミントはクレスの戸惑いが気に触った様子でもなく、少しぎこちない微笑みを浮かべただけだった。
「あの……隣に座っても、よろしいでしょうか？」
「……隣って、ここの？」
　クレスが腰掛けているベッドの近くに椅子は無い。そんなクレスの隣、というと、ベッドの上に並んで二人で座りたい、という事だろうか。
「ミントが気にしないなら、いいけど」
　まだ陽が高いとはいえ、ベッドの上に二人きりで腰掛けるというのは、女性にとって抵抗があるのではないだろうか。もちろんクレスには「そんな」つもりは無いし、これまでだって二人きりになった機会は何度もあった。今更といえばそうなのだが、クレスが頷いてから隣に腰掛けたミ

ントの横顔を見た瞬間、クレスは思わず背中を固くさせた。

「ミ、ミント?」

その横顔が、思ったよりも近かった。クレスが想像していたよりもずっと近くにミントが座ってきたからだ。そんなつもりは全くないのに、異性がこんなに近くに居る事自体が、緊張する。
思わず視線が泳ぐ。贔屓目に見なくても美しいと思うミントの横顔をこんなにも近くで直視なんて出来ない、と俯いた。瞬間。

「……どうしたの?」
「え?」

腰掛けたミントの膝に載せられた彼女自身の両手。固くぎゅっと握られたそれが目に入った。

「手が震えてる」

慎重に、威圧を与えないように、囁くように伝えた。もしかしたらミントはそれを隠そうとしていたかもしれないが、隣にいるミントが震えているのに見ない振りをする事は、クレスには出来なかった。
ミントの両手にまた力が込められる。震えを押さえるようだったそれは、しかし、少しも治まらなかった。むしろ頑なになってしまったせいで、余計に震えが大きくなってしまう。

「……怖いの?」

クレスの言葉に、ミントがクレスを見上げた。本当に近い場所で、視線が重なり合う。やはり美しい人だと改めて思う。共に旅をしていると歳相応の可愛らしさも垣間見せるが、こうして近くでまじまじと見つめると、綺麗な女性だなという印象が強い。
そんな人の瞳が、静かに揺れた。

「……はい」
「明後日の出発、延期してもらう？」
「いえ。本来なら一刻も早くダオスの城に向かうべきなのに、それを私個人の感情で延期するべきではありません」
「でも」
　戦うのは他でもない、ミントを含めたクレス達なのだから少しくらい気持ちを落ち着けるための時間を設けてもいいのでは。そう言おうとしたものの、ミントが困ったように微笑みながら首を横に振った。
「きっと、一週間、一ヶ月……あるいは、一年経ったとしても。この恐怖は拭えないと思います。それだけダオスは」
「強い、よね」
　こくり、とミントが頷く。思い出すのはあの地下墓地での光。ダオスが放った光は、黒騎士団の面々を一瞬にして消し去った。あの光を超える力でダオスを討たなければならない。
　油断なんてしない。だが、もしもあの光に呑まれてしまったら。きっと一瞬で、これまで培ってきたものが無くなる。全てが終わる。助けたかった人達を助けられなくなる。
「ごめんなさい」
「え……？」
「クレスさんにまで、余計な事を考えさせてしまって」
　ミントの眉が辛そうに歪んでしまう。そんなに表情に出てしまっていただろうかと意識した時、確かに頬が強ばっていたのを自覚した。
「いいんだ。本当は、僕も怖いんだから」
　それが外に出たくなかった理由。落ち着かない気持ちを紛らわせるならむしろ外出した方が良いのかもしれないが、他人の視線や、太陽の光を浴びる事すら億劫だった。後ろめたいわけではない、ただ、明るい場所に立つ自信が今は無かった。

「けど、僕達がやらなくちゃいけないんだ」

戦う理由がある。助けたい人達が居る。待ってくれている人達が居る。戻らなければならない場所がある。その決着をするのは、他でもない自分達でなくてはならない。それだけは、はっきりと言える。

だから、と。クレスは一度大きく深呼吸をして、ミントの手を握った。

「ク、クレスさん」

ミントの手が、これまでと違う意味で震えた。驚きと、ほんの少しの恥ずかしさ。だが再度ミントが見上げたクレスの表情はぎこちなさが垣間見えるものの、笑顔だった。

「だから頑張ろう、ミント。皆で、生きて帰ろう」

今出来る精一杯は彼女に笑顔を見せる事だと、クレスは思った。

この震えを止める事は出来ない。自分にもっと力があって、絶対に勝てるという確信があるなら、あるいは可能だったろう。残念ながら、クレスの剣士としての実力はそこまで及ばない。

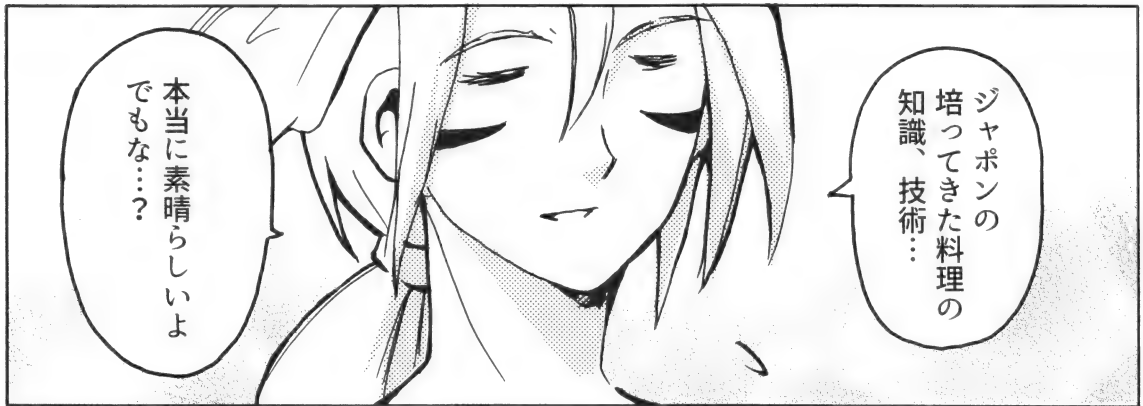
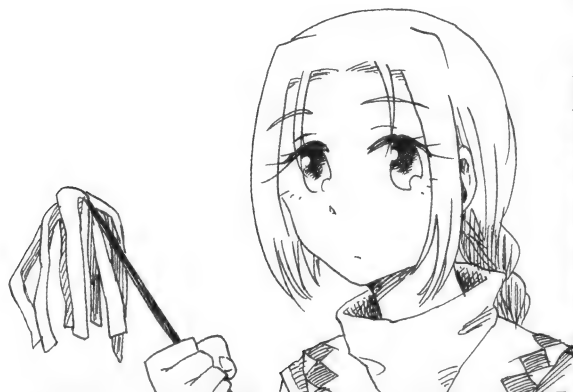
しかし、ミントの恐怖を知る事なら出来る。彼女が何を思っているのかを知って、彼女に共感する事なら、今の未熟な自分にだって可能な筈だ。

「はい。クレスさん」

震えは治まらない。けれど、頷いたミントがその手を握り返してくれた。

これだけでも今はいい。それ以上を望むのは、きっと身の丈に合っていない。

いつかは彼女の前をしっかり歩いて彼女を導いてやりたい。頭の片隅でそう思いつつ、クレスはもう一度、掌に力を込めたのだった。

終

20th anniversary

すずの料理当番

by マッハ☆なめみそ

攻めの姿勢

ジャポンの料理

すずの部族
ジャポンの料理は
かなり変わっている
納豆です
サッ
ニチャア
くっさあ
あぁぁぁぁ

納豆にはナットウキナー
ゼ菌タンパク質分解酵素
に血栓を融解する効果が
ある上ビタミンB群アミ
しゅん
……
なあ、すずよ
なっとうを素手で持つのは
やめなさい

ジャポンの
培ってきた料理の
知識、技術…
本当に素晴らしいよ
でもな…？
昆布巻きだけでなく
サラダ用の
キュウリを全部
ぬか漬けに
するのは
やめてくれないか？
ぷ〜ん
ガーン
日持ちするのに

そしてダメ押し

ああ
すずちゃん…
すっかり
落ちこんで…
プン
どんより
こりゃあ
少し
言い過ぎて
しまったなあ

ここは
オレに任せろ!
アニーキ!
おおっ
「やさしいあにき」の
称号を持つ男!
たのむぞ!!

すずちゃん!
ジャポン料理
最高だよ!
バチーン
オリーブビレッジ
ロールがオレ、
一番好きだナ!
オリーブビレッジ
ロール
アボカド
サーモン
こめ

ワー
ダダッ
あんな
エセジャポン料理と
一緒にしないで
下さい!
すっ
すずちゃ
――ん!
オリーブビレッジ
ロールは「のりまき」を
ヒントに作られた
南国の名物料理なのだ!

完

ユークリッドから
愛をこめて
だすぽ
何してるのよ
クラース
サボり？
英気を養っている
と言ってくれ
ミラルド
この時代に魔科学
代替エネルギーの
研究を進めると
いうのは相応に
大変なんだ
なにせ先駆者が
ほとんどおらず
基礎研究も進んで
いない魔科学全盛
の今助成金も
なるほど
サボりね

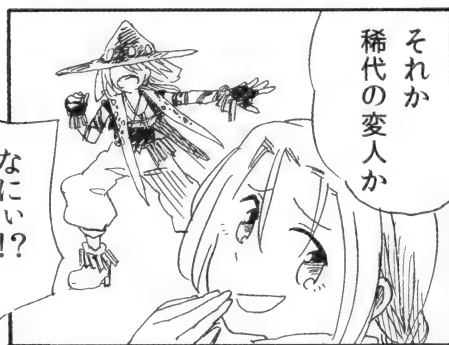
煽ったって何も出やしないぞ

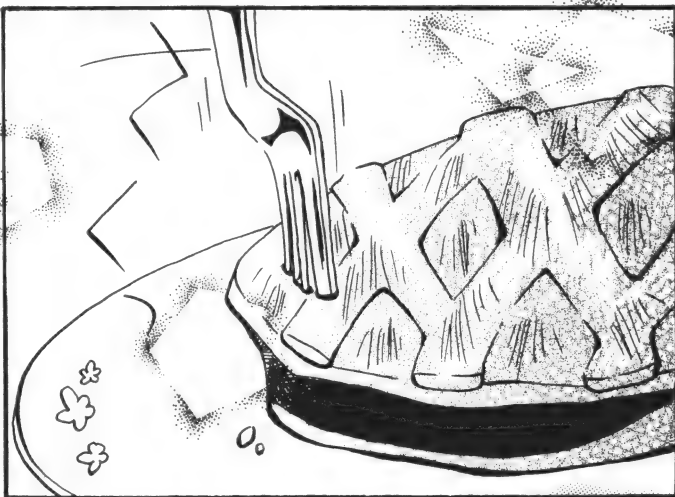
クレスさん達に

もう会えないのは寂しいわよね

わっ

と言ってもまだ産まれてすらいないがね

偉大なる研究者クラース・F・レスター
その名は100年後の未来に轟き刻まれていることだろうさ
いや、150年後かもしれないいな
それか稀代の変人か
なにぃ!?
確かに魔科学全盛の今代替エネルギーの研究は見向きもされていないが大消失の起こる150年後の未来であればその評価が不当なものであるということが証明され
はいはい
100年後も150年後も時空を越えた冒険だなんて
私には想像もつかないけれど

その出会いはきっと
とてもとても大切で
かけがえのない
宝石のように輝いて
少し・・焼けてしまう
ならあなた
みなさんに胸を
張れるように
がんばらないとね
でも、だからこそ
支えよう
それはきっと
ああ
もちろんだ
彼にしか
想えないこと
なのだから

春を待つ/相模碧

ぱく

あ〜、やっぱミラルドさんのチェリーパイ美味しいわ〜v

……なぁ
ぱく

どうして、

お前は毎日私の家に来るんだ？アーチェ

んー？

ミラルドさんと
クラースの
二人の行く末を見届けるの
どんな一生だったのか
二人はどれくらい幸せだったのか
クレスとミントにばかチェスター
―果てはすずちゃんにも

それを報告する
義務（やくそく）なんて

ハーフエルフの
あたしにしか
出来ないんだから！

未来の友と交わした
遠い約束を果たす為に

…そうだな

あっ
遺言とかあれば
預かるわよ？

ばか言え
早すぎる

あたしはただ
春を待つ

ちなみに一番楽しみに
してるのは ミント

あー…

＊END＊

アセリア歴　××年から

黒月　桜

　何かを貰う、という事は、いつ頃までだったろう。数年前の、誕生日くらいだったろうか。しかしそれもいつしか自分で辞退するようになった。
　他にも、欲しいものがあるか、と聞かれた事がある。それはあくまで父や、母や、祖父からだったけれど、その度にすずは「それでは、今使っているものの刃がこぼれてきたので、新しい刀を」だとか、「手裏剣の手数が少なくなって参りました」と返したものだ。しかしそれは彼らが同郷であり、目上の存在で、すずの欲しかった道具を揃えられるからだった。
　けれど突然、「何か欲しいものがある？」と彼らから聞かれても、すずには咄嗟に答える事ができなかった。何しろ、どんなものを強請っていいのかも、彼らにどのくらい負担をかけていいものかも解らなかったからだ。
　アルヴァニスタの街は、この大陸でもっとも大きな街と言う事もあり、例えダオスの驚異に震えていようとも、やはり活気がある。行き交う人々も、王の膝元という事もあり裕福な人々が多いんだろう。こぎれいな、しかし洒落た格好をしている人々も多かった。
　本来なら、誰かが何かをする時、すずも手伝う事の方が多かった。しかし今日は宿に着くなり珍しく、「色々！　やる事があるから！　えっと、すずちゃんは、あ、あぁそうだ街を見ていてくれないか！　もしかしたら、魔物とか何かがきたら大変だし！」慌ただしくクレスが言っていたし、ミントも「そ、そうですね！　宜しくお願い致します」と畏まって言われてしまったから、言われたそのままに街を見回って、一息吐いた所だった。
　確かに、ダオスの驚異は拭えない。魔科学研究所もあるアルヴァニスタは、またいつその驚異に晒されるかも解らないし、彼らの言い分は一理ある。空は飛べないものの、すずは機動力としたら恐らしく、ある程度は素早い方だと思うし、索敵には適任である事は確かだ。しかし。
　あの人達は、何の準備をしているんだろう。すず以外の皆は、宿に入っていった。だから、きっと大がかりな準備に違いない事は、なんとなく解る。
　ここ数日、あの人達は、妙に浮き足立っている部分があった。何か慌ただしいと言うか、何というか。すずが「何かありましたか？」と聞くと、彼らは揃って何でもない。と返してくる。そうして夜に、なにやらこっそりと話をしている事が多かった。すずは特に何もなければ就寝は早かったし、呼ばれる事もなかったから、何かあったんだろうとは思いつつも、床に就いていた。
　彼らは、何をしているんだろう。宿の方へとちらりと視線を向けた、その時。
　にょっと正面に現れた大きな、紅玉の様な眼差しに、思わずすずは息を飲みかけた、ものの、それが見慣れたものである事に直ぐさま気付いて、喉元に詰まりかけたものをふ、と吐き出した。
「……驚かさないで下さい、アーチェさん」
「あっははは！　良かったぁ、こっち向いてくれて！　このままだとあたし一人で笑って気付かれる所だったんだから」
　悪戯な若い魔女がようやっと、と言う風に声を上げて笑った。なんたってここは高い木の上で、すずと視線を合わせられるような、空を飛べる人間、というものは限られている。しかも、箒にまたがって空を飛ぶなんて事は、彼女以外の他には、すずは見た事がない。
「アーチェさんは、何か仕度があったのではないのですか？」
　彼女も用事があるから、と宿に入っていった人物の一人だ。それにアーチェはうん。と力強く頷いて返してくる。
「準備出来たから、呼びにきたんだ！　ね、来て来て！」
　そうしてアーチェがぐいっとすずの手を取ったのに、すずは表情も変えずに「解りました」と声だけで頷いた。
　彼女は、というよりも、彼らはとてもいい人達だと思う。
　純朴で、真っ直ぐだ。
　喜怒哀楽も各々あり、表情のさして変わらないすずに、いつも笑顔で接してくれる。ひとたび揃えば空気が彩りを帯び、若葉の様な、花

が綻ぶ様な、そう言った光景を眺めているようなその時々で様々だけれど、その様な気分に浸れる。忍という、そしていずれ頭領の道をと決めているすずとしてみたら、それは少し羨ましくもあり、しかし行動を共にしているだけで嬉しく思う。

　そんな彼らが何かをしていたのは、知っていた。けれど、どんな事かは知らなかったし、想像もつかなかった。

　アルヴァニスタの宿の食事は、矢張り都と言う事もあり、美味しく手の込んだ、伊賀栗と異なる味付けの不思議な料理が多い。けれど矢張り複数の客に提供されるものだからどこか機械的で、手作りにしてもある程度型が決められたものの様だ。

　しかし、今日はなんだか様相が違う。一面を眺めてみると、グラタン、サラダにビーフシチューに、ちぐはぐだけれど、刺身の盛り合わせ、更に食材自体が高価だと言うのに味噌おでんまで。それとデザートにだろうフルーツポンチが六人がけのテーブルに、大皿に乗せられて肩を狭くして並んでいた。

　普段なら、皿を並べる事だって宿の給仕がしてくれる。けれど今日は何故かミントが並べていたし、彼女はすずに目を留めると、ぱっと顔を明るくした。

「お帰りなさい、すずちゃん。すみません、えと、お外の事をお願いしてしまって」

「いいえ。現状特に異常はありませんでした。しかし、こちらは」

　ミントは、野に咲く小さな白い花の様な女性だ。元が落ち着いた体で、まるで姉の様な、母の様なイメージが強い。彼女は小さく首を傾ぐと、やんわりと口角を上げた。

「……お嫌いなもの、ありませんでしたか？　すずちゃんが美味しいって言って下さったものをメインにしてみたんですけれど」

「因みに、フルーツポンチはあたしが作りましたー！」

　直ぐ横ではい！　と言わんばかりに右手を挙げたアーチェにも、すずは大仰に首を捻ってみせた。

「いいえ、その……勿論みんな、嫌いではありませんが……しかし何故、皆さんでご用意されていらっしゃるんですか？」

　だって、ここは宿屋だ。素泊まりでもないし、きちんと食事を提供してくれる、アルヴァニスタでもきっての自慢の宿なのだ。けれど会話や、内容を見て、矢矢張り彼らが全て用意しているようにしか見えない。

　すると、フォークとナイフを並べていた花葉色の髪の少年が力強く頷いた。

「うん。ちょっと宿の人にお願いして、色々借りたんだ」

　爽やかな少年だ。きっと今日はここに泊まるから、という事もあるんだろう。普段の真っ赤なバンダナも甲冑も外してしまって、少し幼く見える部分もある。クレスがそう応えたのに、すずは奥の壁に貼り付けられた、いびつな文字の書かれたささやかな、しかし少し大きめな紙に目をやった。

「それで、〝誕生日かもしれないおめでとうパーティ〟とは、一帯どういうものでしょうか」

　ぺらぺらの紙の、恐らくアーチェが書いたんだろう文字には、『すずちゃん、お誕生日かもしれない、おめでとうパーティ』と書かれていた。けれど、それが今一要領を得ないのだ。確かに今日は生まれた日ではないし、あながち間違いではないのかもしれないけれど。

「だってさぁ、すずちゃん頑なにお誕生日教えてくんないんだもん！」

「それは……」

　むぅっと口を尖らせたアーチェに、すずは思わず言い淀んで返してしまった。

　以前「ねぇねぇ、誕生日っていつ？」と聞かれた事があり、すずはそれに、「それは、答えられません」と頭を振った記憶がある。勿論、彼らに教える事が嫌な訳ではないけれど、他に誰かが聞いている可能性もあり、忍にとっては、小さな情報でも仇となる事があり、万が一に備える形でそう答えたのだ。

「で、そんな感じだったから、そこのバカが考えたんだよ。まぁ、悪

くない案っちゃあ案だけどな」

全員分のコップに注いだんだろう。とん、とすっかり空になった瓶を置きながら、チェスターが軽く笑うと、今度はずいとアーチェが背後から顔を出した。

「バカって何よバカって！　そう言う方がバカなんですからねー！」

「いきなり言い出した日に今日やるとか言い出すのはバカだろバカ。準備すんのも手間かかんだからな」

「まぁ、ここを借りる手続きをしたのは私だがな？　悪い案じゃあなかったとは思うが、とかくお前達、騒ぎすぎだ。準備ができたんだから今はとにかく、食事にしよう」

何を、と言いかけたアーチェの声を遮る様に、だろう。尤も年長であるクラースが、もう随分と前からそうしていたのか、テーブルに腰掛けたままでそう差すと、口を尖らせていた少女はすっかり気分を変えた様で、「うん、それもそうね！　お腹すいたー！」とテーブルに駆け寄った。

各々近くの椅子を引いて、それぞれ腰掛けるのに、すずも自分の席を探した。普段はすずは空いている、もしくは末席を選んでいた。しかし何故か今回はアーチェに「こっちこっち！」と背中を押されて、テーブルの一番端の、上座につく事になってしまった。

「あの」

居心地が悪い訳ではないのだけれど、なんだか少し落ち着かない。それにアーチェがへへ、と笑った。

「そこって主役の席なんだって！　ていうか席って偉い人から順番に座るの、決まってるのねぇ」

「当たり前だ。私は特に気にはしないが、抑も上座ってのは年長者や、立場が尤も上なものが座るもんだ。今回は、主役であるすずの席。ぴったりだろう」

「あー、〝年長者が座る〟ねぇ。そりゃあ、ねぇ」

「おい、年長者を際立たせるんじゃない！」

にやにやと笑っているチェスターに向かって、クラースが私はおっさんじゃあないからな！　と語尾を荒げた。

そんな事なら、普段なら手伝う筈なのに、テーブルに並べられたぴかぴかの丸皿と、銀のフォークへと視線を下ろす、と。

「……私なんかのために、有り難う御座います。お誕生日、お祝いをされるのが久し振りな気がします……」

僅かに記憶があるのは、四歳くらいのころだった。伊賀栗では年の始めに全ての人間の誕生日を執り行うものだったが、家の中では今日はすずの生まれた日なのだよ。と父と母が夕食を少しだけ豪華にしてくれていた。勿論それは忍として本格的な訓練を始めてから、すず自ら辞退したし、いつしかその日は、何でもない日になってしまったものだけれど。

「何だよ、嬉しいんなら嬉しいって言えよ」

「いえ、何とお伝えしていいのか、解らなくて」

本当に、解らないのだ。もう何年もそんな事をしていないし、しかも友人方に、まるで心配しているかの様にこんな風にされる事は、今までなかった。クレスははは、と笑いながら、頷く。

「そりゃあさ、すずちゃんは凄く立派だと思うよ。忍たろうとして、勤めだって。けどさ、誕生日くらいは祝わせて欲しいなって思う。だって、すずちゃんが生まれてきたとても素晴らしい日なんだし、それに」

僕は、そう言う時、凄く嬉しかったから。柔らかく、懐かしむ様にクレスが笑ったのに、すずはきゅ、と口の端を結んだ。

そう言えば彼も、両親を亡くしているのだ、と言っていた。しかもそれは彼の誕生日に近くして、だ。彼もその日には様々な思い出を持っているのだ。良い事も、悪い事も全て。

けれど、それでも誰かの年の瀬は祝いたいのだろうと思うのは、彼らがとてもいい人だからなのかもしれないし、もしかしたらそれが普通の人々の感覚なのかもしれない。伊賀栗で育ち、忍としての心得をそこは、すずには解らない。

「でさ、でさ、ホントのトコ、お誕生日っていつなの！？　近かった

らちゃんとしたお祝いできないじゃん。こう言うのはもっとぱーっと、どかーんってやりたいし、矢っ張りケーキのロウソクを吹き消すのは、お誕生日じゃないとだし！」

「どんな理屈だよ。まぁ、ってな訳で、こいつの我が儘によってだ、流石にケーキは用意してないんだけどな」

取り分けられたグラタンを受け取りながらチェスターがこちらを見て、にやり。と笑った。

しかし。

「いえ。しかし、絶対に皆さんには教えません」

小さくかぶりを振って、はっきりと答えた。元より教えるつもりのない、情報だ。

「おいおい、そこまで嫌か」

きっと、仕方がないなぁ。と言う体なんだろう。クラースがペイントまみれの肩を小さく竦めてみせる。ある程度彼は色んな事を先読みしてくれる。しかし、きっとすずの気持は解っていないのかもしれない。感情を汲んでそう言ってくれたんだろう。勿論、すずはクラースではないから、本当の所は解らないけれど。

「ざんねんー。矢っ張り、忍だからって奴？」

アーチェが口を尖らせたのに、すずはゆっくりと首を振った。勿論初め聞かれた時はそれもあった。忍は必要な情報は、自らに繋がる事は人に簡単に教えてはならない。例えば伊賀栗の場所を知っている、家族構成の事を知っている、父と母を救ってくれた彼らでも、だ。仲間として加わった当初はそう思っていた。けれど今では違う理由があるのだ。

「私の生まれた日は、もっとずっと後ですから。お教えした時に皆さんが元の世界に戻られて、お祝いして頂けなくなったら、お伝えした事が無駄になってしまう……と言いますか」

「無駄って……そう言うんじゃねぇだろ。俺達はただ」

「お祝い、して下さるのはとても嬉しいんです。しかし」

すずは、手に取ったフォークをぎゅ、と握り締めた。伊賀栗にいる時は殆ど箸ばかり使っていたから、初めは余り慣れない道具の一つだった。けれど今ではすっかりとそれは手に馴染んで、以前より上手く使える様になった。

しかし、随分彼らに馴染んで、ある程度思った事を伝える感覚が変わってきた自分でも、今の感情をどう伝えていいのか解らない。感情を伝える訓練は、してこなかったのだ。

きゅ、と口を結んだままでいると、腹の辺りがむずむずとする。こんなにして貰って勿体ない、だとか、嬉しい、だとか。けれど伝えられないもどかしさだとかで、だ。

その時、対面に向かって腰掛けていた最年長者がゆるり、と手を挙げた。

「いや、そう言ってやるな。私にはその気持ちは解らんでもない。無駄というより、寂しくなるからだろう」

「……解りません」

どうしてそんな事を思ったのか、解らない。腹の中がきり、と痛むのが、そう言う感情であるのかは、すずには良く解らないのだ。

その時かたん、と椅子が下がる音がした。今まで料理を取り分けていたミントが、役目を終えて腰を下ろそうとしていた。彼女はゆっくりとそうすると、「すずちゃん」か細い声で、呼んだ。

「私達は、とても勝手にやっているんです。きっと。けれど、すずちゃんが楽しいって思ってくれれば、私は、いいえ、きっと皆さんもそう思っていると思います。私も誕生日は母にお祝いして貰っていたから、ちゃんとしたお誕生日をお祝いできないのは、少し残念ですけど。すずちゃんと、短くても、色んな思い出を作りたいんです」

「うん。確かに僕達は、時空を隔てて、絶対に会わなかった筈なのに、こうして一緒にいる。だから、なんて言うのかな。勿論やらなくちゃならない事は沢山あるけれど、ミントの言う通り、こうしてすずちゃんと思い出を作りたいんだ。別に、こういう誕生日、とかじゃなくってもさ。いつかは別れなくちゃならないとしても、ちょっとでもすずちゃんと色んな事をしたいって思うんだ。……それがまぁ、僕もアー

チェの意見に賛成した理由の一つなんだ」
続いてクレスが笑ったのに、すずは口の端が僅かに傾ぐべきなのか、それとも上げて、少し笑うべきなのか、自然と頬が悩みを持ったのに気付いた。
こんな時はどうしたらいいんだったろう。昔そうした時には、父は笑ったし、母はどういたしまして、と言ってくれたものだ。ゆっくりと、深々とこうべを垂れた。
「皆さん。本当に、有り難う御座います」
自分は忍だ。元々が裏切り者の父と母を止めるため、里を出ただけだった。初めに、彼らに助けられた事からが始まりだった。それから彼らを手伝う事を決め、そうして一緒にいる。時間としたらとてもとても短いものだ。しかし彼らはとても気さくに、疑う事はする時もあるけれど、仲間の誰もを信じている。それはすずの事も洩れず、だ。
ただでさえ、良い仲間に恵まれたと思っている。しかしこんな、一時の事でさえ、彼らは大切にしてくれるのだ。
「まぁいいじゃん！　とにかく、誕生日かもしれないパーティ！　何でも楽しいのがいいし！」
「そうだな。食事は温かい方が美味い！」
そうしてクラースが小さく目配せした、のに、一斉にフォークが動いた。
すずもそれに倣って、グラタンのマカロニをすくい上げてみると、つやつやの、ホワイトソースがとろりとまとわりついていた。
料理自体はした事がある。しかしこうした、伊賀栗の料理以外のものは、彼らと旅をしてからまともに調理する事になった。この料理は、とても手間がかかるものだという事も、沢山失敗して知っている。小麦粉を玉を作らずに練るのはとても難しく、火加減によっては直ぐに焦げてしまう。ビーフシチューだって、とても難しい料理だ。きっとクラースとミントが揃って腕を振るったんだろう。食材だって、これだけの料理を作るなら、揃えるにしても手間も金もかかっている。
口に入れるとホワイトソースが口の中でほろりと解けていった。味付けは、ミントのものだった。
「誕生日、かもしれないにしても、こうしてお祝いされるのは、久し振りです」
「そうなんだ！　やっぱさ、やっぱさ、プレゼントとか貰った！？」
「はい。……昔は、ですが」
「そっかぁ。やっぱプレゼント、必要だったかぁー。ごめんね、今回時間なくて、何にも準備出来てないんだぁ」
「いいえ、これだけで充分です」
充分過ぎるくらいだ。すずが頭を振ると、また対面でふむ。と小さく笑った。
「ならどうだ。流石にユミルの森まで行くのは難しいかもしれないが、私の家の近くに、桜を植えてやろう。あれは、ある程度の時間なら寿命があるだろう。我々と別れた後にも恐らく見られるだろう。私は、一五〇年前の人間だからなぁ……何かを残すってのは、難しいかもしれんが」
「えっずるい！　じゃあ、えっと、えっと、あたしは……」
「いやお前は会えんだろ。ハーフエルフなんだからよ。でもよ旦那、ユークリッドは村から町に変わっちまってるんだろ？　俺は様子見た事ねぇけど、下手すりゃ植えたの切られちまってる可能性あるんじゃねぇの？」
「ふ、ぐっ！　な、ならばどうだ！　私の発行する書籍に、さり気なく君達全員の名を刻んでやろう！」
「いやそれあくまで発行予定ーでしょー？　もっとケン……セツ？的な事にした方がいいよぉ。あ、じゃあさ、リンゴの木樹を植える！秋になればいつでも美味しいのが食べられるよぉ！」
「お前にしちゃまともな事と、まともな言葉使うじゃねぇか。しかし、上手く実りゃ、の話だろ？」
「大丈夫だよぉ。ちゃんとアーチェさんが肥料とか、お水とかあげるもん！」

「どーだか。三日で枯らすんじゃねぇの？　ていうか、お前一人で植えんなよそれ。絶対枯らすから」
　喧々囂々と、食事時に騒がしいものだ。すずはこの所祖父と食事をするくらいしかなかったし、抑も食事は静かに摂るものだと教えられてきた。けれど彼らがいて、食卓はとても鮮やかに彩られる。
「ははは……けど、そう言うの、なんかいいなぁ。今は、約束出来ないけれど、ちゃんとダオスを倒して、故郷を復興させて、そう言う事してみるの、いいなぁ」
「はい。とても、素敵だと思います。すずちゃんは、そう言うの、どうですか？」
　クレスが頷いて、ミントがそれに続いた。しかし。
「いえ、皆さん。充分です。残されたら、私はきっと、どうしていいか解らなくなります」
　これだけでも、充分すぎるくらいだ。しかしそれにクラースが、小さく鼻を鳴らした。
「いいか、私にしてみればお前も、そっちのお前達もだ。ただの子供でしかないんだぞ。子供ってもんは遠慮するもんじゃない。……残される方は寂しいと思うだろうが、思い出に浸る事も、悪い事じゃあない。と言うか、お前らはもしかしたら会えるかもしれんが、私はそうじゃないんだぞ。何かくれてやる機会を与えて貰いたいもんだ。まぁ、何にするかは楽しみにしておいてくれ。お前がいる、この一五〇年前でな。で、時々私の事も思いだしてくれよ」
　それにアーチェが、「何だか今別れなくちゃならないみたいじゃん！　あたしはすずちゃんともっともーっと一緒にいたいんだからね！」とふくっと頬を膨らませた。

＊＊＊

　とん、と地面を蹴る。頭領としてはまだ不十分な実力だが、ある程度は伊賀栗の里を纏めていけるようになった。いくつかの任は里の者に任せる事にはしているけれど、それでも時に自分が動かねばならない時がある。
　今日はその一仕事を終えた、帰り道だった。そう言えば、こちらの方に出向くのは久し振りだ。
　すずが今過ぎ去ろうとしているのは、ミゲールの街に程近い、名もなき森だった。調べ事のために精霊の洞窟を捜索していたのだ。別にここを横切る必要はない。けれどそうできる際は時折ユグドラシルの様子を見にきたりしているのだ。大陸の端にある事もあってなかなか時間を取って立ち寄る事はできなかったけれど、久し振りにゆっくりしてみるのもいいかもしれない。
　小さな森だけれど、入ってみると、意外に奥が深いものだ。そうしてすずは、辺りをきょろりと見回した。
「今度さぁ、クレス達のうちの近く行ったら、すずちゃん、森の方見てみてよ」
　少し前、すずに会いにきてくれた、ハーフエルフの友人がそう言っていた。いいものあるから。あたしも一緒に行くから。けれどすずの方がなかなか時間がとれなくて、結局は今の今まで一緒にくる事ができていなかった。
　世界樹の樹の横には、小さな墓がある。すずは良く知らないけれど、アドネードの名を冠していると言う事は、きっとあの人の縁のものなんだろう、と想像はできた。
　ウリボアがかさかさと背中の当たりを過ぎていくのに、あの人達はここを走り回ったりしていたんだろうか。と思いを馳せてみる。けれどそれはもう五十年も前の話だし、三十年前だとしても、きっとそんな少年じみた事はしなくなってしまったのかもしれない。
　彼らが過ごしてきた時代から、もう何十年も過ぎてしまった。下手をすると、百何十年だ。時を同じくした彼らの時代から、すずの時代は、とても遠いのだ。
　その時、ふ、と目を掠める色があった。森だから、墓周り意外は手入れをする事を敢えてしていないんだろう。緑色に紛れて、ふんわり

とした白い色が見えた。
あんな色、この森にあっただろうか。今まで大樹の陰に隠れて気が付かなかったのかもしれないし、時期の問題もあったのだろう。
なんとなく、直ぐ側に足を運んでみると、それはすずの背丈よりも随分大きな、太い木だった。木々の間には真っ白い花がふんわりと咲き誇っていて、辺りに甘い香りを振りまいていた。その木は、村にもあるものから、すずは知っていた。
リンゴの木だ。
ぼんやりと見上げていると、風で枝が揺れ、葉の隙間から木漏れ日が落ちてくる。のと、同時に。
ちかり、と上の方で何かが光った。何か、ある。
「……すみません」
誰ともなくそう言うと、すずは地を蹴って、枝に飛び移った。ずっと、ずっと上の方で、確かに何かが光った。
葉が風に揺れた時、またぴかりと輝いたのを見つけて、すずはその枝へと手を延ばした。ぎゅ、と捕まえたものは、銀製の、平たい板だ。名札の様に、針金で枝に結わえ付けられていた。
それに、文字が刻まれているのに気が付いて、すずはじっと目を凝らした。何年前に付けられたのか解らないそれは随分くすんで、黒ずみを帯びていたからだ。けれど、なんとか、文字は読める。
『アセリア歴、四三五四年。親愛なる、友人へ。』
誰が植えたものかは解らないし、誰に宛てたものなのか、普通なら解らないだろう。けれどすずはそれが誰なのか、誰に向けてなのかが、直ぐ解った。そ、と木の幹に触れると、それはざらざらでこぼことした皮だったけれど、なんとなく温かい様な気がする。それにまた、ぎゅ、と胸が締め付けられるようだった。
「……皆さん、お誕生日お祝い、有り難う御座います」
律儀に、あの五人の誰かが、もしかしたら複数かもしれない。以前すずに言ったように、いつかも解らないその日のために、ちゃんとお祝いを残してくれていたのだ。誰が植えたのかは解らないけれど、それだけは良く解った。
まだ、少し時間があるだろうか。ぼんやりと考えてみる。どうせ帰り道、船に乗らなければならないのだから、ユークリッドにも寄るだろう。あの人の家の側を探ってみようか。伝え聞いただけだけれど、そこに彼の家が建っていた事は知っている。律儀な彼の事だから、きっと何か残してくれているかもしれない。それがこんな形で木であるのか、それとも書籍であるのかは解らない。もう、百五十年前の話だ。もしかしたら何も残っていなくてがっかりするかもしれないけれど、律儀な人だから、少なからず何かしらしてくれていただろう。
それに。ここは、ミゲールの街にも近いのだ。随分とおじいさん、おばあさんになってしまった友人へ、久し振りに会いに行ってみるのもいいのかもしれない。
「すみません、皆さん。一つ、頂いていきますね」
誰一人何も言わないんだから。
アセリア歴四二〇二年、そして四三〇四年からなる、親愛なる友人方へ。沢山、伝えたい事があった。
もしかしたら忘れているかもしれないけれど、「見つけました、有り難う御座います」そう伝えるために、柔らかな花を一つ、摘み取った。

流行らせたい。

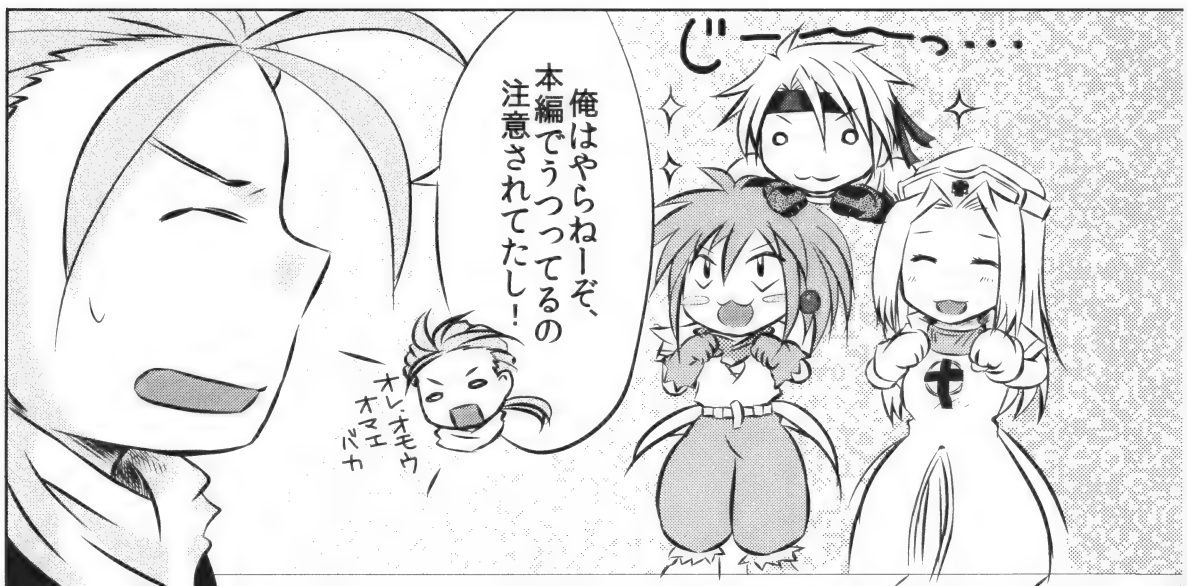
山本のりまき

テイフェスの影響で語尾がにゃんこになってしまった二人

ファンタジア20周年おめでとうですにゃん♥

にゃん！

はいはーーーい！アーチェさんも真似するにゃん！

かわいいから～

感染した。
パインいっぱい入れてくれにゃん…
はいですにゃ～
仕方ねえにゃ～
じりじり….
……
…
こっちでも感染
ひまだにゃあ～
おこまい
YEAH!!
おもしろい
kawaii!

ミントを
振り向かせたいんや!

Byめぐり

星空がキレイだねミント
本当ですね

くしゅんっ
大丈夫かい?少し肌寒いね
!
そうだ…!

バッ

入る?

ミントにあんなに冷たい目で見られたのは初めてで…っ
うぅ‥
うっ‥
…
ミントの目にはよほどお前さんが猟奇的な変態に見えたんだろうな
ドンマイクレスー

なるほどな ミントとよりを 戻すためには どうしたらいいいか ってことだな？
はい…
人生は…
夢だ
名言をそんな軽いノリで使いますか!!?
※ドラマCD参照
安心しろ クレス
クラースさん…
ははは 大丈夫だ クレス！
ミントを もう一度惚れさす スマートな方法を 我々が実演して みせよう!!
びしっ
本当ですか!?
私はクレス役を…
ミント役を 頼む!!
アーチェ！
合点!!
……ミント 話があるんだ
何？ クレスさん
あれっ こんな背景 だっけ？

僕は今まで自分が胸を張れるのは剣術だけだと思っていた…
けど違った
もっと魅力溢れるものが僕の中にもあったんだよ
それは——
召喚術だッ!!!
それって男としてそんなに良いステータスだったんですかーーっ!?
クル
トゥンク
トゥンクじゃないぃッ!!
でも…クレスさんそんなことよりも
私はもっとクレスさんに磨いて欲しいところがあるんです♡
私はクレスさんの明るくて優しいところが好き…
だから…
その明るさをもっと増して欲しいんです

明るくて…見ているだけで元気をもらえて

眩しいんだけど目は伏せたくなくて

時には暖炉の光を自らの後光に変えてしまったり

光を操っては壁を焦がしたりして…

ギュッ…

アァァァサ

そう…

天光満つる処が頭頂にあるような…!!

まさかと思うけどそれレオニス村長のことじゃないよね!!?

っていうかなんでそのエピソード知ってるんだよ!!

フフフ知ってるかい?

このバンダナを外すとね…

まさか…!

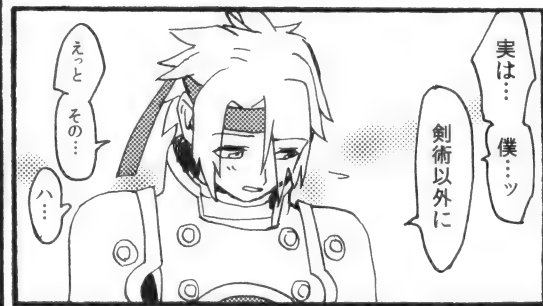
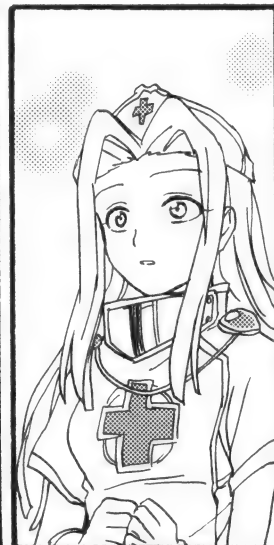
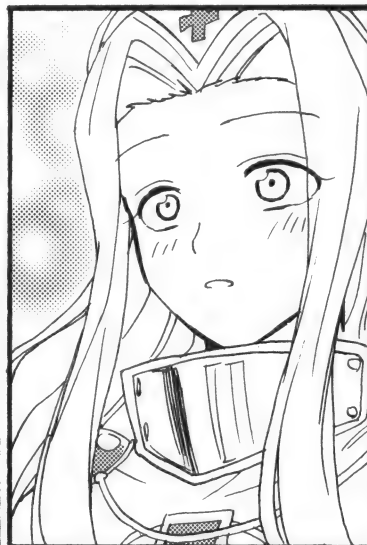
滑走路のようなラインハゲが…!!

ストーーーップ!!!

もう!! 全然参考にならないよ!!

オッサンとうわばみ系女子に頼った僕が間違いでした——ッハイッ!!

ひっでえコイツ

あの…
話があるんだ
ハンドパワーが使えるんだッ!!!
結局似た手法取り入れてるし!
実は…僕…ッ
剣術以外に
えっと
その…
ハ…
本当ですか?クレスさん!!
え!?
実は私も最近手品に凝ってまして…!
特にハンドパワーのMr.マゾックの大ファンで本を集めてるんです!!
クレスさんよろしければ教えてください!!
キャ
キャ
思わぬ展開で仲直り…いや墓穴を掘ったなクレス…
ミントって多趣味だよね
えーっとちょっと頭の中を整理していいかな?
Mr.マゾック
HAND
わかる手品
おわり

アイテムあれこれ

栗缶

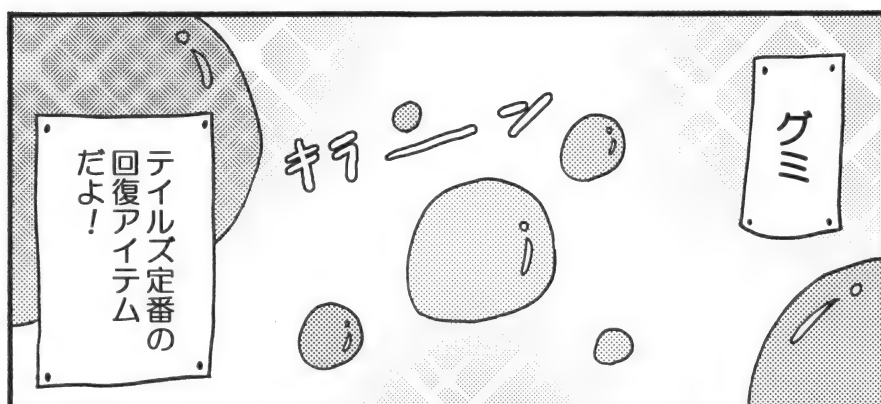
テイルズ永遠の謎である。

うつしみしっぷ
残像がつくよ！

おー！
忍者になったみたい！
楽しぃー☆

戦闘終了
やったぁ！
クレス！

それ禁止！
うぷっ
ごめんっっっ
残像酔いしました。

後衛に大ダメージ。

ピンナップマグが飛び出した時の気まずさったらないよ！

一番の不確定アイテム、ルーンボトル。

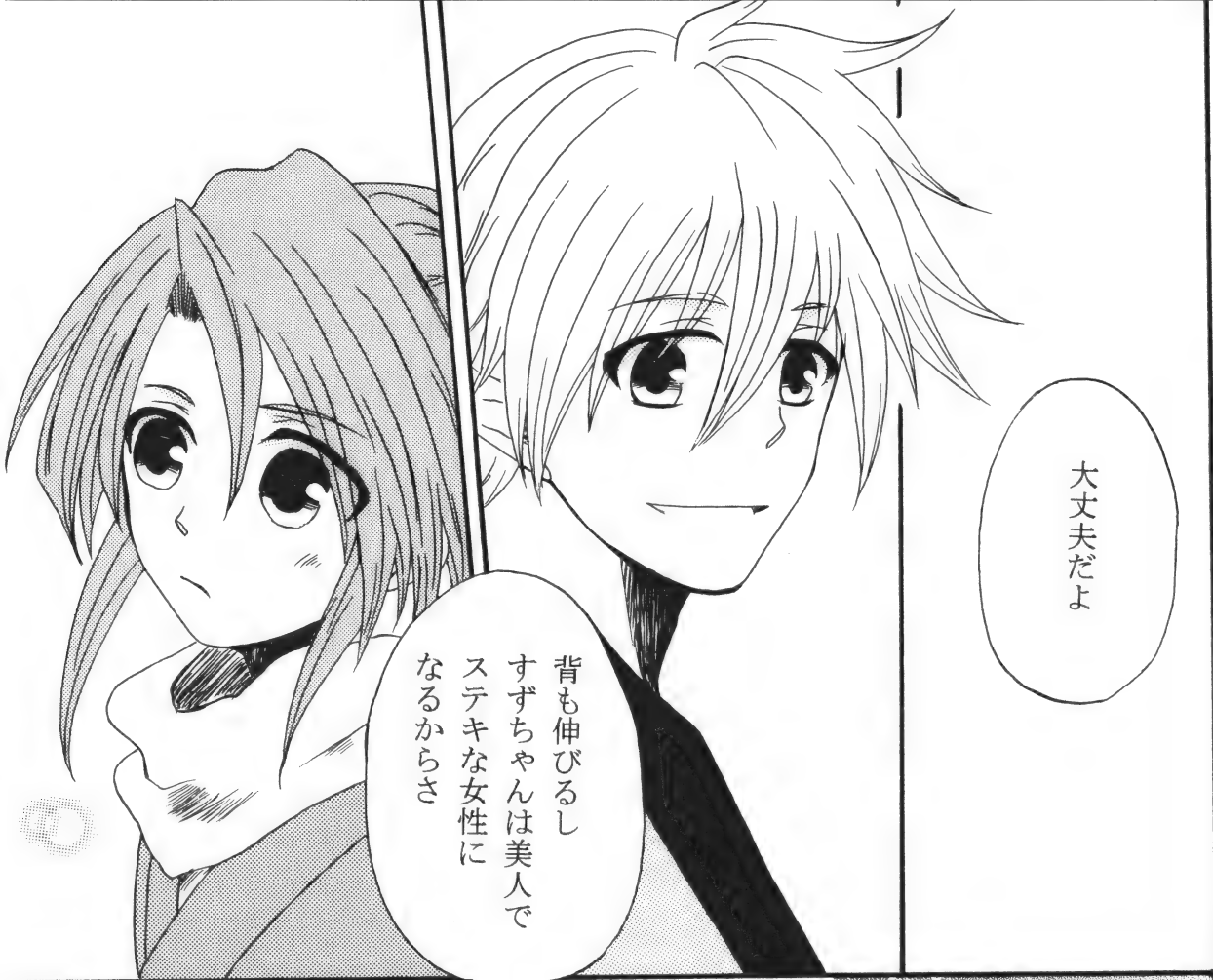
君に伝えたいこと
根元双葉
ジュー
わっ
ミント！お湯があふれてきたよ
大丈夫ですよ少し火を弱めましょう
ただいま戻りました
お帰りすずちゃん
見回りお疲れ
今日の当番はアーチェさんですか
そうなんだよひやひやだろ
すずちゃんはあいつと違って料理もできるししっかりしてるよな
そんなことはありません

辛い料理はどうも加減がわかりません
はは。
そうだった
でもアーチェさんは料理が苦手かもしれませんが
それよりもすてきなところがたくさんあります
まぁ、元気はあいつのとりえかもな…
ばか
クラース肩もんであげよっか
ミクレス
さっき寄った街で気になるものがあったらしいですよ
ほお…
でも
それを言うならすずちゃんだってそうだろ

俺は思うぜ
すずちゃんは今も十分しっかりしてるけど
あと5年もしたら背も伸びて美人になるし
もっといろんなことに触れて素敵な女性になるってな
チェスターさん
問題はすずちゃんにへんな虫がつかないかってことだよな…
？
こらそこの変態
誰が変態だ

ごはん
できました
大成功♥
本当かよ…

いこうぜ
いこ
はい

おれも小さい頃は
そんなに背は
大きくなかったよ
でも気づいたら
おふくろの背
追い越してたかな

大丈夫だよ

背も伸びるし
すずちゃんは美人で
ステキな女性に
なるからさ

やっぱり
よく似てますね

え？

fin

鯛も一人はうまからず

柿沢瑠菜

「――レイ！」
ハーフエルフの力在る言葉が、大気中のマナを光の矢と変え魔物の身体を貫いていく。降り注ぐ光の雨から逃れた魔物は怒りの声をあげ、空中を駆ける敵を打ち落とさんと棍棒を振り上げた。
「させるか！　疾風ッ！」
が、その棍棒は放たれた矢に腕ごととられ、遥か後方の樹木に叩きつけられた。
「うわっ、あっぶなー！　ありが、」
「隙だらけなんだよ！」
「一言多い！　もー！　せっかく人が素直にお礼言おうとしてるところに！」
腕を失い怒り狂う魔物から視線は逸らさず、しかし場にそぐわない言い争いを始める二人の間を、目にも止まらぬ速度で小さな影が駆け抜けていく。
「忍法！　飯綱落とし！」
高く高く跳び上がり、その勢いを利用した回転斬りが魔物の身体を大きく裂いた。だがその手ごたえに小さな忍者は顔をしかめる。
「浅い……！」
「すず、さがれ！　――シルフ！」
後方からかけられる声と同時にすずが跳び退がると、退避の時間を稼ぐように風の精霊が放つかまいたちが魔物の動きを奪った。
「シャープネス！」
風を振り払った魔物の視界に映ったものは、虹色の力を纏った鋭い剣の閃き。
「襲爪雷斬！」
そしてそれが、魔物が最期に見たものとなった。
どう、と大きな音をたてて魔物が倒れ込む。雷で焦げた毛皮の臭いがあたりにたちこめたが、すぐに風に流され消えた。
「ふう、勝った勝った。しぶとかったねーこいつ」
「申し訳ありません、先程は助かりました。ありがとうございます、クラースさん」
「気にするな。怪我はないな？」
「はい」
「ありがとうミント。さっきのシャープネス、タイミング

ばっちりだったよ」
「いえ、お役に立ててなによりです」
「あ、こいつチーズ持ってる」
「焦げてない？」
「食える食える」
戦闘を終え、それぞれがほっと息をついた。
魔物の所持品だったチーズを取り上げたチェスターを見、アーチェが腹を撫で擦る。
「ねーねー、そろそろご飯にしようよ。あたし、お腹空いちゃった」
「オレも。腹減った」
「そうだな、そろそろそんな時間か。……で、今日はどうするんだ？」
クラースの問いにアーチェがはいはいっと手を挙げた。
「あたし七匹ー」
「……すずは六匹です」
「オレ九匹！」
「やった！　僕さっきので十匹！」
「うわマジかよ！　くっそー、惜しかったな……」
「じゃあクレス、昼飯は何がいい」
「はい！　ポークステーキがいいです！」
「了解」
おきまり、という感じのやりとりを終えるとそれぞれが昼食の準備にとりかかった。即席の調理台をつくる者、火を起こす者、休憩場所の準備を整える者、料理をする者。役割はそれぞれ事前に取り決めがされているらしく、動きに迷いはない。
「そろそろ食材が減ってきたな。街に戻ったら買い出しに行かねば」
「足りないものを記しておきます」
「ああ、頼んだよすず」
すっかり野営食に手慣れたクラースは人数分の昼食をさっさと作り上げた。焼き上げられたポークステーキがじゅうじゅうと脂の弾ける音を立てている。つけあわせの野菜は茹で上げられたばかりの鮮やかな色合いで簡素な食卓に彩を添えていた。メニューのリクエスト主のクレスの目の前には、一番大きな肉が置かれている。
いただきます！　六人分の声が重なり、和やかな食事が

始まる。
――さて。ここまでにかかった時間は三十分もないが、以前はこうはいかなかった。
食べ盛りを多く抱え、さらにその食の好みも違うともなると、まずメニューのチョイスからわりと真剣な争いが起こる。特にクレスとチェスターとアーチェはその傾向が激しかった。食に対して譲れない十七歳たちである。一番新しく仲間に加わったすずも、食に関しては周囲が驚くほどこだわりが強かった。普段は忍者としての振る舞いを重んじるすずの思わぬ子どもらしいところを、ミントなどは微笑ましく思ったが、クレスとチェスターとアーチェはそう悠長にかまえてもいられない。競争相手が増えたのだ。
調理係のクラースとしては、さっさと決めてもらって調理にとりかかりたいのだが、そうもいかない。毎度なにかしらの騒ぎが起こる。
そこで提案されたのが、「一番魔物を多く倒した子のリクエストに応える」である。こうすれば食事前の厄介な小競り合いもなくなるし、戦闘での集中力も保てるだろうということだったのだが、これが大当たり。手柄を焦らないことだけきつく言い聞かせれば、ほぼ完璧な効力を発する強い御触れである。（ちなみに調理の担い手のクラースには酒場で飲んできてもいいよ権が、補助と回復専門のミントには好きなときに好きなものを作ってもらえばいいよ権が与えられている。前者に関しては街に戻るたび権利を行使されるので見直しが検討されている。後者に関しては週に二度ほどのペースで甘いものを作ってもらっているようだ。）
ともあれ、この画期的な制度の発足により彼らの食事風景は段違いに平和なものとなったのである。

「はー、美味しかった。ご馳走様でした！」
「ごっそさん。よっしゃ、次はオレ負けねえからな」
「ごちそーさま！　あたしだって負けないんだからね！」
「御馳走様です。すずも負けません。次は和食が食べたいですから」
「ご馳走様でした。クラースさん、お皿は私が洗うので、休んでいてください」
「お粗末様でした。すまないな、ミント」

食休みののち、またそれぞれ決められた責務を果たしながらてきぱきと野営跡を片づけ、一行は行動を再開した。
午後も少なくない数の戦闘をこなし、戦いの腕を磨く。
しばらくは付近の人たちが平和に暮らせるであろう、といったところまで魔物を倒した彼らが街に入ったのは、もう夕暮れの頃合だった。
「あー疲れた！　これから買い出しかー」
「店が閉まる前に行くぞアーチェ。クレスとチェスターは武具の方を頼んだぞ。ミントとすずは宿の手配を頼む」
「はーい」
「了解」
「わかりました」
「では、また後程」

三組に分かれ、一行は目的の場所にそれぞれ進んでいく。
クラースとアーチェは食材屋を目指していた。
「何買えばいいんだっけ？」
「すずがメモを書いてくれた」
「ポークと卵と人参とじゃがいもと……フルーツは？」
「まだ大量にあるだろう」
「えー足んないよ」
「お前がつまみ食いしなければ足りるんだ」
「だから足んないんだって」
「つまみ食いしなければ足りるんだ！」
　あーだこーだとフルーツをねだるアーチェを叱りつけながら、クラースはてきぱきと買い物をすませた。見目の奇抜さをのぞけば完全に主夫であることに、本人自覚があるのかどうかは定かではない。
「ケチ！」
「つまみ食いするなよ。したら足りなくなるからな」
「絶対足りなくなるよぉ」
「だーかーらぁ！　つまみ食いを！　しなければ！　足りるんだ！」
　アーチェのおねだり攻撃を振り切り、クラースは食材屋を出る。店主がこっそりおまけに果物を入れてくれたことを彼はまだ知らない。
「まったく、お前と買い出しに来るといつもこうだ」
「いつもじゃないわよ。三回に二回くらい」

「だいたいいつもだろうが。……で、アーチェ。そっちの袋はなんだ？」
ぎくり、とアーチェがかたまる。クラースが食材屋の店主と雑談をしているあいだにこっそり自費で購入し、本来の買い物のなかに素早く紛れ込ませたものは、しっかりと看破されていた。
「……お、おやつ」
「にしてはミルクだのチキンだのパスタだのチーズだの、おやつにそぐわないものばかりだな？」
「全部中身わかってんじゃん！」
「ああ、グラタンの材料だな。チェスターがこの間美味い美味いと食べていたチキングラタンの」
「あーあーあーあーあー！」
耳を塞いだアーチェの顔は真っ赤である。クラースはアーチェが放り出した袋を危なげなくキャッチし、くつくつと笑った。
「お前さんにも可愛らしいところはあるんだな」
「うっさいうっさいうっさーい！　あー失敗したあんたと一緒じゃないときに買えばよかった……ああもう……あたしのばか……」
ぱたぱたと顔の熱を冷まそうと手で扇いでいるアーチェに対し、クラースは実に楽しそうだ。
「まあまあ。よければ作り方のコツを伝授してやろうか」
「……それよ。前から思ってたんだけど、あんたどこで料理おぼえてきたの？」
あー……、とクラースはやや口ごもったが、すぐに言葉を続ける。
「学生の頃しばらく料理が上手い女性のところに転がり込んでた時期があって」
うげ、とアーチェが大げさにのけぞった。
「やだ、思った以上に理由がえげつなかったわ」
「料理の腕をあげておけば別のところに転がり込むときにいいかなと」
「さらにえげつなかった！」
学生時代に少々クラースが荒れていたらしい話は酒の席できいてはいたが、そういう荒れ方だったのとアーチェは呆れた。つつけばもっとえげつない話が出てきそうでおもしろ、……おそろしい。

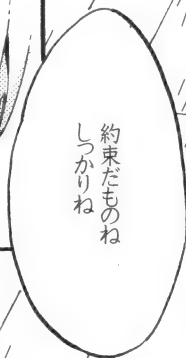
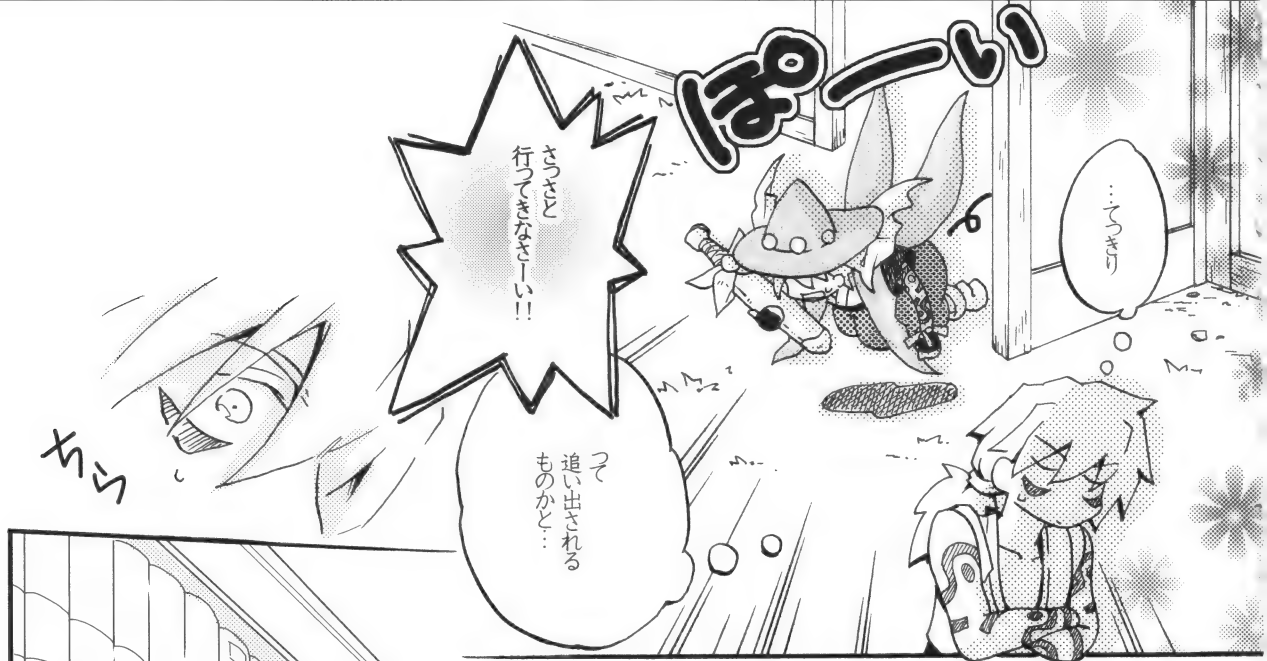
「まあ予想外のところで役に立ったがな。いいじゃないか別に」
「ミラルドさんに言いつける」
「やめろ」
「帰ったら絶対言いつける」
「やめろ！」
「じゃあ今度フルーツ多めに買ってね」
「この、……わかったよ、まったく……」
いいからかいのネタができた、とアーチェはほくそ笑む。先程までとすっかり力関係が逆転している。
「で、どれくらい転がり込んでたの？　三年くらい？」
「そんなに長く同じ場所に居着けるか。せいぜい一か月くらいだ」
うそぉ。思わずアーチェから驚きの声が漏れる。
「あんた、一か月だけしかいなかったのにあんなに料理おぼえたの？」
「まあ基本はな。あとはまたそれぞれ別の場所で」
「えげつなくおぼえたと」
こほん。クラースの咳払いにアーチェは肩を竦めた。

「なに、時間はたっぷりあるんだ。帰ったらしっかり教えてやろう」
そーね、とアーチェが頷いた。なにせ百年以上も時間はあるのだ。幸か不幸は置いておき、料理の腕を磨くにはもってこいすぎるほどの時間だった。
その長すぎる時間をもってしても、アーチェの壊滅的な料理の腕が上達するかは、正直クラースにも確信はもてなかったが。
「あんたが生きてるあいだにしっかりたっぷり学ばせてもらいますよっと」
「私の教える腕が悪いと思われるのもしゃくだからな、完璧に身につけろよ。……ところでアーチェ」
「なに？」
さきほどアーチェが放り出しクラースがキャッチした荷物袋を、クラースがずいと突き出す。
「お前さん、どさくさに紛れて私に全部荷物を押し付けてるぞ。自分の分は持て」
ぽん、とアーチェは手を叩いた。それと同時に現れた箒にまたがり、颯爽と飛び上がる。

「じゃ、あたし先に宿行ってるから」
「おいこら！　待ちなさいアーチェ！」
伸ばした手はアーチェの服の裾を掴み損ね、街の空には一線の飛行機雲が浮かんだ。
百二年後、アーチェが完璧なチキングラタンを披露できたかどうかは――神のみぞ知る、というやつである。

a respite／イツミ
コンコン
クラース？
そろそろ夕食に…
…あら

それって…時空の剣よね？
ああ
私が責任を持って封印しよう
クレスと約束したからな
それにはまずフレイランドに…
ふ
…そう
約束だものね しっかりね

ぽーい
さっさと行ってきなさーい!!
…てっきり
って追い出されるものかと…
ちら
また長旅になるわねしっかり準備しなくちゃ
今度はクレスさんたちもいないんだもの
えっとグミの買い置きは…
…いや、まだいい
え?
す…
無論いずれ行くことにはなるが
少しばかりゆっくりさせて貰っても罰は当たらないだろう

…冷めないうちに
夕食にしようか
そんな顔をされたら
行ける訳がない
また
待たせることに
なるのかと
どうも
ホームシックが
過ぎたみたいだ
あら
それは光栄ね

執筆者様
Comment&
Information

キク 様

http://gardengrass.web.fc2.com/index.html

ファンタジア
20周年おめでとう
ございます!!

表紙を描かせて頂いて
いまだに恐縮しておりますが
節目の年に、このような形で
参加＆お祝いができてとても
幸せです！Ｐメンバーはホント
何度描いても楽しくて愛しくて…。

（表紙に描ききれなかった
キャラ達も大好きなので
ここに詰め込んでみました。）

お声かけ下さって本っ当に
ありがとうございました！

これからも、ずっとずっと
愛してますっ！！！

キク

山田ちう　様

http://cucumber00.jimdo.com/

緑の6号　様

http://pixiv.me/mido006

桜咲まこと　様

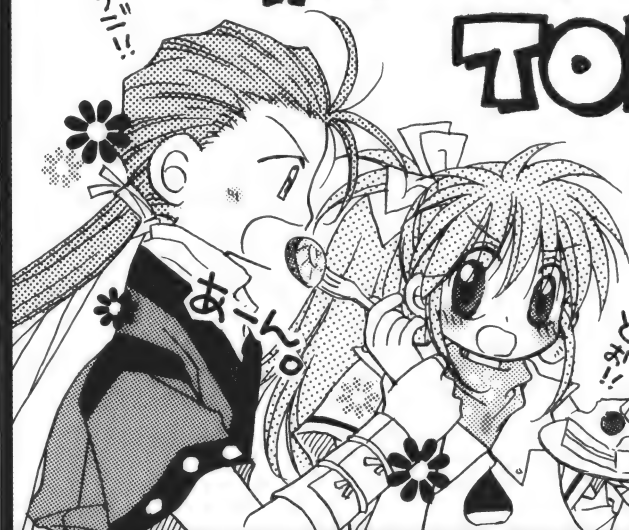
http://www.pixiv.net/member.php?id=2321747

TOP20周年
&
アンソロジー
発行おめでとう
ございます！

素敵な企画に参加出来て
楽しかったです！
ファンタジアのキャラは
ダオス様も含めて
全員愛しいー！
全員描いたの初めてで
衣装間違いが凄いけど
ずっと大好きです！

桜咲まこと

小杉るな子　様

No Site

シャチ 様

http://15xichigo.web.fc2.com

蒼乃りん 様

http://blue.peewee.jp/eb/

ワタナベ修　様

http://pixiv.me/tankobu2ko

テイルズオブファンタジア20周年
おめでとうございます！！！！

20周年記念プチのアンソロジーに参加出来たこと、大変光栄に思います、ワタナベ修と申します。中学生の頃からネットの片隅で細々とクレミンSSを書き続けていたのが懐かしくも有り、同時に数々の恥を晒したのが今では悶絶してしまうほど恥ずかしくも有り。あの頃はすずちゃんの年齢が一番近かったはずが、今ではクラース1歩手前の年齢にまでなりました。似たような状態になっている方は、多いのではないでしょうか。

活動ジャンルが変わってもファンタジア、そしてずっと愛し続けているクレミンが特別な事には変わりないなと、今回のお話を書きながら実感していました。

【インフォメーション】
ワタナベ修は、主にピクシブでSSを公開しております。
現在のメインジャンルは艦これです。
夜戦忍者と二水戦侍の組み合わせにピンと来たら是非どうぞ。
テイルズSSもクレミンを中心にいくつか掲載しています。
（ピクシブID:1152637）

K　様

http://www.pixiv.net/member.php?id=1722066

マッハ☆なめみそ 様

http://twitter.com/namemiso

PHANTASIA FESTA開催
&
アンソロジー発行
おめでとうございます!

描かせて頂き大変光栄です。
大好きなファンタジアの人々を描けて
とっても楽しかったです！

INFORMATION
現在同人活動は休止中ですが
アルパカや動物モチーフのハンドメイド雑貨を
作って活動しています。twitter→@namemiso

だすぽ 様

http://www.pixiv.net/member.php?id=101382

黒月桜　様

http://pixiv.me/kurotukiyou

山本のりまき　様

http://makinoya.gozaru.jp/

めぐり 様

http://inisheeeer.jp/

D・キッサン 様

https://twitter.com/d_kissan

栗缶　様

http://xxxhayamisan.web.fc2.com/

根元双葉　様

http://hanauta.blog61.fc2.com/

柿沢瑠菜　様

http://id31.fm-p.jp/290/kyouroitteki/

アンソロ発行＆ファンタジア20周年おめでとうございます！！
めでたい！！本当にめでたい！！
あっこんにちはもしくははじめまして。柿沢瑠菜と申します。
普段はクラースさんのブーツにこっそり
こんにゃくを仕込む仕事に就いています。嘘です。
私はファンタジア15周年ちょい過ぎくらいにはまった新参なのですが、
ここでこうして20周年を祝えていることが本当に嬉しいです。
おめでとう！おめでとうございます！！
これからもファンタジアわっしょいしながら生きていきたいです。
最後になりましたが、こんな素敵な場にお招きいただきまして、
相模さんには感謝しきりでございます……！
ありがとうございました！！ビバファンタジアー！

イヅミ　様

http://grenadilla.fc2web.com/

祝☆20周年！！

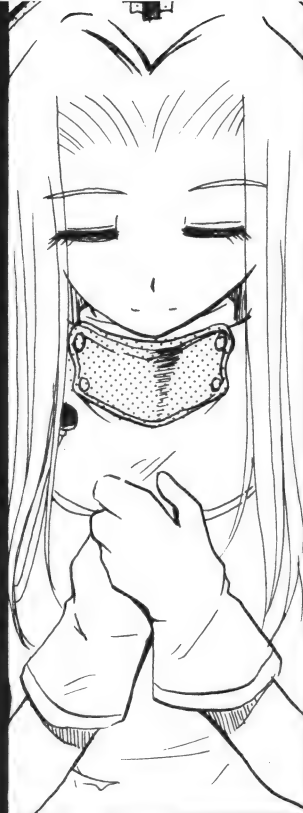
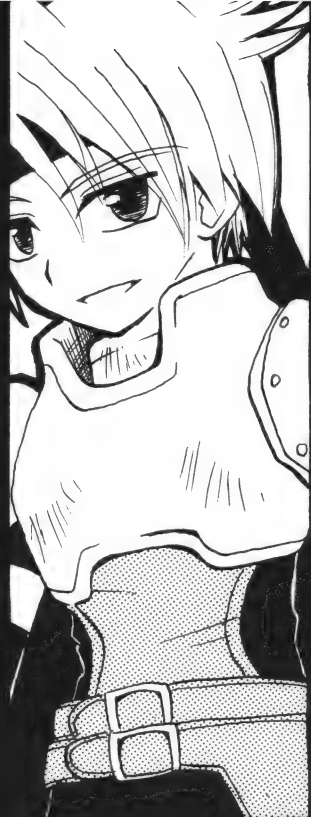
発売20周年というこの記念すべき年に
描かせていただけて光栄でした。
TOPの温かい世界観とキャラたちが
今でも愛おしく大好きです。
そしてクラミラはそろそろ結婚しろ。
お誘いありがとうございました！！
イヅミ

「グラナディラ」という個人サークルで
TOPクラミラやオールキャラで
のんびり描いてます。
まだまだ熱いぜファンタジア！

相模碧(主催)

http://helianthuslath.web.fc2.com/

ご寄稿いただいた作品への感想などは執筆者様へ
直接お伝えください。

サイトをお持ちでない執筆者様へのご感想は主催へ
お寄せいただければ責任を持ってお伝え致します。

TALES OF PHANTASIA
20TH ANNIVERSARY

初めましての方もそうでない方もこんにちは。
このアンソロジーを主催いたしました相模碧と申します。
ファンタジア発売20周年という節目に、みんなでお祝いしたい！と思って開催を決めたプチオンリー内の企画としてこのアンソロジーを発行いたしました。
初めてのことばかり、不安だらけの始まりでしたが、たくさんの人のお力添えを得て、無事発行することが出来ました。深く御礼申し上げます。

プチオンリーの企画や、アンソロジーの編集作業を通して、たくさんの方が今もテイルズオブファンタジアを愛していることを深く感じました。
企画発端は私個人ではありますが、このような機会に恵まれたことは多くの人々の応援があったからです。
テイルズオブファンタジアへのおめでとうの言葉と共に、多くの方と関わるきっかけをくれた最愛のゲームに心より深く感謝しつつ、後記とさせていただきます。
ありがとうございました！

2015.10.4　相模碧

TALES OF PHANTASIA
20TH ANNIVERSARY
ANTHOLOGY

大樹の下で祝祭を

CCS10内プチオンリー
「PHANTASIA FESTA」内企画

テイルズオブファンタジア
20周年記念アンソロジー
「大樹の下で祝祭を」

2015.10.4/発行日
相模碧(Helianthus)/発行者
日光企画様/印刷
p-fes20th@hotmail.com/連絡先

◆プチオンリー「PHANTASIA FESTA」告知サイト◆
http://pfes20th.web.fc2.com

Coverillustlation
キク

Comic&Illustlation
D・キッサン
K
蒼乃りん
イヅミ
柿沢瑠菜
栗缶
黒月桜
小杉るな子
桜咲まこと
シャチ
だすぽ
根元双葉
マッハ☆なめみそ
緑の６号
めぐり
山田ちう
山本のりまき
ワタナベ修
(５０音順・敬称略)

相模碧